

説明ギャップをめぐる議論の整理とその批判的検討

若林佑治 (Yuji WAKABAYASHI)

東京大学総合文化研究科

心身問題を考える上で、一つの重要な視点を与えてくれるのが、レヴァインによって提唱された説明ギャップである (Levine 1983)。

レヴァイン(1983)は、熱=分子の運動であるという同一性は完全に説明的であるのに対し、痛み=C 繊維の発火であるという同一性には説明ギャップが存在すると主張した。まず、前者の同一性に関しては、次のように考えることができる。熱の概念は、温かさや冷たさという感覚を通して経験される現象、温度計の水銀の膨張と収縮の原因となるといった、因果的役割で分析し尽くされる。そして、その因果的役割が、どのようにして実行されるのかを理解したなら、それ以上知ることは何もない。一方で、後者の同一性に関して、痛みの概念は、因果的役割に加えて、痛みの質的な感じ (クオリア) を含む。これによって、痛みの因果的役割がどのように実行されるのかを理解した後も、C 繊維の発火という物理的状態になぜこの感じが伴うのかという問いが成立する。この、痛みの質的な感じというのは、物理的な観点からでは理解可能とならない。従って、痛み=C 繊維の発火の同一性には説明ギャップが存在する。これがレヴァインの指摘である。

この、説明ギャップに対しては、これまでに様々なことが指摘され、議論されてきた。チャーマーズ(1995)は、クオリアに関しての事実は物理的な事実からは直接導き出すことができないのであるから、還元的な説明は不可能であるとして、二元論の立場をとる。しかし、クオリアに関しての事实在物理的事実からはアプリアリに導出可能でないことを認めながらも、物理主義を主張することは可能である。この点は、様々な論者によって指摘されている。例えば、フラナガン(1992)は、クオリアと脳状態の同一性を主張しているが、彼によれば、そのような同一性は観察によってではなく、最善の説明への推論 (アブダクション) によって獲得される。内観による心的状態の観察、三人称的視点からの脳状態の観察をいくら行っても、それらの間にいかなる関係が存在しているのかを観察することはできない。しかし、物理的世界の因果的閉包性や、クオリアと脳状態の同時生起といった事実を考慮すれば、アブダクションによって同一性へと到達することが可能である。

その他に、物理主義者からの応答としては、現象概念戦略があげられる (Tye 2002, Papineau 2002)。現象概念戦略によれば、クオリアと脳状態との間にギャップが存在するように見えるのは、それぞれの概念の持つ特性の違いによる。痛みの感覚などの、内観を通じて獲得される概念は、現象概念と呼ばれ、他の記述を介さずに、直接的にその指示対象を指示する。それに対し、脳状態などの物理的概念は、様々な記述を介して、その指示

対象が定められる。現象概念と物理的概念は、以上のような異なる特性を持ち、それぞれが独立して機能するために、一方の概念から他方の概念を導出することはできない。しかし、このことは、それぞれの概念の指示対象の間にギャップが存在しているということを示しているわけではない。説明ギャップと言われているのは、2つの概念が異なる特性を持っているということに過ぎない。概念化の方法は異なっているが、どちらの概念も同一の対象を指示している。以上が現象概念戦略による説明ギャップへの応答である。

本研究発表では、上記のも議論も含めた、1990年代から2000年代初頭にかけて行われてきた説明ギャップをめぐる議論を整理、批判的に検討し、物理主義の観点からの心身問題の解決の可能性を探っていく。